

## 誇りを育てる

園長 児嶋 草次郎

2月23日(日)、私たち職員と、小学4年生以上の子ども達計41名は、石井記念友愛園から西都市都於郡(とのこおり)城跡まで、約20Kを歩きました(小3以下は都萬神社から10K)。名付けて「20Kハイキング」。1月26日(日)には、「高鍋の蚊口の浜まで10Kハイキング」で歩いています。昔は、この中原地区の人々も歩いて海水浴に行ったりしたという話を聞いたことがあり、10Kは生活圏内の距離です。しかし、20Kとなると、少々気合いを入れなければなりません。私たちは昔、夏のサバイバルキャンプの時、一日40Kくらい歩いたことがありますので、その半分の距離にそう抵抗感なく取り組み始めることができましたが、一般の方々から見たら冒険の世界に入るのかもしれない。1月の10Kハイキングの時には、石井十次の会宮崎支部の方々、4、5名が参加して下さったのですが、20Kには辞退されました。

なぜこのような行事をやるのか。以前にもこの友愛通信に書きましたが、まず鍛錬であり訓練であります。子供たちはいずれここを巣立っていきます。東京や大阪など大都会で生活することになる子供たちもいるでしょう。自然災害の多い日本において、大都会にいる時地震等に遭遇したら、交通機関等利用できない状況下で、逃げ出すのに頼れるのは自分の足だけです。『自分は10K、20K歩いた経験がある』という思いは、そういう危機的な場面で、自分を奮い立たせることなのでしょう。それに、「20Kハイキング」のスタートする前にみんなに話したのですが、アメリカの大統領が『プーチンは悪くない。ウクライナのゼレンスキーは独裁者だ』などと言い出すような世の中になって来ており、人災をも今後想定する必要性が出て来ております。

それからもう一つ、このような体験型の行事には大事な目的があります。自分たちが暮らす地域の歴史や文化について、体で覚えるということ。知識ではおそらく学校で学んでいるでしょうから、この友愛園では感性の次元で学習するのです。これもりっぱな教育だと思います。

私は昭和24年に、この石井記念友愛社の静養館で生まれ、今友愛園の子供たちの通っている茶臼原小学校、木城中学校へ通い、高校は高鍋高校へ進学しました。いわゆる団塊の世代と言われる世代に属し、多くの子供たちがイモでも洗うようにゴチャゴチャな環境の中で、貧しく粗雑に育ったと言ってしまうでしょう。戦前の教育否定もバックにはあったと思うのですが、この宮崎の地、児湯郡の地、木城町の地に育ったという歴史的・文化的な誇りはみじんもありませんでした。ただ片田舎に育ったという劣等感と宮崎弁を引きずりながら、大都会東京に出かけていきました。それでも何とか生きていけたのは、大都会に集まっているみんなが同じような境遇だったからでしょう。

その後この養護の仕事をするようになり、多くの子供たちの養育と教育に携わるようになって、「誇り」を育てることの必要性を強く感じるようになりました。特にここに来る子供たちは、自分の家族に恨みを持っていたり、人間不信が強かったり、とても誇りどころではなく、自己肯定感も低く、卒業すると逃げるようにここを去っていく子もいました。

「誇り」を育てることが、私の大きな課題となったのです。「労作」もそうですが、体験型学習もそ

の一つです。先月の「旅行教育」、そしてこの「20Kハイキング」等がその内容になります。近隣の名所旧跡を訪ね、体で（感性で）その歴史や文化を覚えるのです。この歴史的に文化的に豊かな児湯郡・西都圏域に育ったことを誇りにできるように育てるのです。大都会に出ても、自慢して自分の故郷のことを話せるようにしてあげたいのです。そういう気持ちで、日本人としての誇りへと醸成されていくのだと思います。自分の故郷にマイナスな感情しか持ってない者が、どうして日本人としての誇りを抱けるのでしょうか。古い町に育つ子供たちは、その町の伝統的な行事やお祭りに小さい時から参加することで、自然にアイデンティティとしてその歴史・文化を取りこんでいくのでしょうか、この地域は石井十次以降、また戦後も開拓地であり、残念ながらそういうお祭り等は日々の生活の中にありません。時空と生活圏内を広げて、意識的に掘り出していかねばなりませんでした。

朝8時30分から9時頃にかけてグループごとに少しずつ時間をずらしながら出発。少々冷えてはいましたが快晴であり風もそう強くなく、ハイキング日和でした。私はいつものように最後尾を歩きます。元気良く咲き始めた梅の花の香りをかすかに感じながら、私も張り切ってスタート。

最初の目的地は西都市内の都萬神社です。太陽神アマテラスの子ニギノミコトとコノハナサクヤヒメが出会い結婚式をあげたところとか。小学生の頃、遠足で訪れた記憶がありますが、その由来については学んだのか学んでないのか、全く記憶にありません。このニギノミコトのひ孫が高原町で生まれたササノミコト、後の神武天皇です。高原町に児童養護施設「神武の家」を作るという御縁に恵まれたのは、この都萬神社のお導きなのかもしれません。そう言えば茶臼原台地からは、あの霧島山を遠くに望むことができます。

子供たちも張り切って歩いているのか、歩くペースも早く、私も付いていくのに必死でした。茶臼原台地を下りた所に流れる一ツ瀬川の流れは穏やかで、西の米良山系の山々は青く輝いていました。すでに畦塗りを終えた水田も見られ、春に向けて、農家の人々も活動を始めているようです。都萬神社に着くと、樹齢1200年以上の楠の老木が私たちを迎え、子供たちは、クイズに挑戦したり、拝殿にお参りしたりしていました。私の口からは、『掛（か）けまくも畏（かしこ）きイザナミのオオカミ一』というあの祝詞（のりと）が自然に出て来て、側にいたナツコとサコがびっくりしていました。

次の目的地は国分寺跡です。国分寺と言えば奈良時代で今から1200年以上前です。当時の聖武天皇は仏教によって人々の心の平和と世の太平を実現させようと、全国の主要地に国分寺を創建しています（741年）。都（奈良）から派遣する官僚（国司）の働く国府とセットになっていたようですから、西都市が当時、この日向の地の中心地であったことが分かります。

西都原古墳群のある台地の一番東側の裾（すそ）にあるのが都萬神社だとするならば、そこから台地の南側に向けてなぞるようにぐるっと時計回りに回ったところが国分寺跡です。前回は途中の公園で昼食弁当を食べたと思うのですが、みんなどどん前へ歩いていきます。都萬神社からは、小学1年生から3年生の子供たちも加わり、にぎやかな歩行となっています。「記紀の道」を通って稚児の池へ上がり、年間40種以上の野鳥が見られるという池のカモたちをながめながら南へ向かいました。

国分寺跡のお堂に安置されている五体の巨大な木の仏像は、子供たちを温かく迎え入れてくださいました。国分寺としてはその後衰退するのですが、江戸時代中期、その再興を願った木喰上人によって作られたとか。作りは素朴だけど、エネルギーは充分に感じとれます。子供たちはそれぞれにクイズの答えを搜したり仏像を見上げたり、木魚をならしたりしながら休憩時間を過ごしていました。私は1000年以上に渡って人々の命を受け止めて来た庭のあちこちを歩きながら、昔の痕跡を搜しました。青磁のカケラを拾って、「1000万円しないかもしれない」と言ってシュウキに渡しました。ここでもだれも弁当を広げませんでした。

南向きの小高い丘の上にこの地の国分寺は建っていたのでしょ。ここに来て思い出すのは、私の兄の住んでいる岡山県総社市の国分寺跡です。あそこにはまだ五重の塔が残っており、当時の風景をよりイメージできます。ここも南側一体には田園地帯が広がっていて、当時は村々や水田地帯が一望できたと思うのですが、現在は、荒れた竹藪が視界をさえぎっています。これから坂を下って南に向かって直進することで、都於郡城跡に到着します。

目的地の城跡の伊東マンショ象前に最後尾で到着したのは、1時頃でした。すごく早いペースでした。水田地帯をひたすら歩いていると風景が単純になるので疲れが出て来ます。腹も減っているし、路ぞいの土手、川の堤防、鉄塔の下などで、グループごとに弁当を食べていました。私も最後尾のグループに合わせて食べましたが、のんびりする余裕はありませんでした。

無事に全員到着して何よりでした。子供たちは休む暇なくサッカーを広場でやり始めたりしますから、その底知れぬエネルギーを見せつけてられる時ともなります。しっかり目的を達することのできた20Kハイキングでした。私は少々疲れましたが、なぜか今年は、つえを使わずにすみしました。75歳もすぎたようとしているのに、あと何年一緒に歩けるのでしょ。

翌日2月24日(月)は、静養館で論語の素読をする「明倫塾」。私は、素読の前に前日のおさらいとして次のような話をみんなにしました。

ロシア・ウクライナ戦争が始まって、今日でちょうど3年になる。今朝の朝日新聞によると、ウクライナ軍の死者46,000人、民間人の死者12,654人、ロシア軍の死者95,026人と書いてある。また、ロシアに連れて行かれた子供たちは19,500人以上だそう。

超大国ロシアを相手に、ウクライナは負けずに戦っている。プーチンは、1、2週間程度で制圧できると予想していたのに、ウクライナは、なぜ負けないのか。もちろんEU側から武器の支援があつてのことだけど、自分の国に対する確固たる「誇り」があるから負けないのだと思う。

ウクライナという国は、今まで何度も大国から踏みにじられて来ている。それらの歴史をしっかりと学び、独立を勝ち取ったという誇りを持っている。だから3年間耐えながら防戦できているのだと思う。

自分の国に誇りを持てと突然言われても、イメージが湧かない。守ろうという気持ちも湧いて来ないだろう。自分たちが生まれ育った土地の歴史や文化を学び、誇りを持った時に、その地を、家族を守ろうという気持ちになるのだと思う。その気持ちが拡大した時に国を守ろうという意欲になるのだと思う。

1000年単位でこの児湯・西都地域を見つめると、歴史的な事件が様々に起きている。戦争の歴史は、侵略の歴史であり抵抗の歴史でもある。この児湯・西都地域でも多くの人たちが亡くなっている。しかし、結果的には、その地で生活する人たちがしっかりと自分たちの暮らしを守ったから、今の平和な生活がある。

・平成京遷都(奈良時代)は710年。聖武天皇が国分寺を全国各地に創建している(741年)西都の国分寺跡はその頃作られたお寺。仏教に寄って太平の世を作ろうとした。すぐ近くの木城・西都線が当時の国道であり、みんなは国道沿いに歩いたと言ってもよい。

・大分県の宇佐八幡宮が創建されたのは725年。東大寺が国分寺の総本山だけど、大仏が建立された時(752年)は、宇佐八幡宮が支援したと言われている。

・平安京遷都は794年(平安時代)。855年頃、宇佐八幡宮の神職土持氏(田部氏)が、荘園の管理を開拓のために延岡に派遣された。

・平安時代末期頃には、「土持七頭」と呼ばれたくらい、土持一族がそれぞれに繁栄独立し、地方豪族

として宮崎県全域を支配するようになった。

- ・1192年源頼朝が鎌倉幕府を開く。この頃地方の管理のために派遣されたのが伊東一族であり島津一族であった。その頃、財部（高鍋）の土持は、財部土持（1223年）と呼ばれるようになった。

- ・伊東、島津はどんどん勢力を拡大し、この三者は互いに対立するようになった。そして、1457年、財部土持は、伊東氏に滅ぼされた。

- ・1475年、伊東氏は島津氏に滅ぼされる。この時、都於郡から逃げ出したのが後の伊東マンショであり、我々は20K歩いたけど、マンショたちは西米良の方を回って、大友氏の助けの来ていた高千穂まで200Kくらい歩いたそうだ。

- ・1587年、島津は豊臣に破れたが、この時の戦いがこのすぐ近くの根白坂の合戦です。福岡の方では秋月氏が豊臣に負け、1588年、今の高鍋へ移封となった。

こうして振り返ると、1300年ほどの壮大な歴史絵巻となります。石井十次はこのような歴史的基盤の上に理想郷を作ろうとしたのだし、私たちは、その時の流れの中に身を置いています。その時の流れを自らの魂の中に導入し、アイデンティティを養っていかねばならないし、その歴史・文化の上に育つことを誇りとしていかねばなりません。